

NATIONAL  
DIET  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2018.3

国立国会図書館  
月報



おーるあばうと レファレンス協同データベース  
デジタルライブラリーカフェ 営業中  
資料の世界の歩き方 変体仮名でめぐる資料あれこれ



683号 2018年3月

# 国立

# 国会

# 図書館

# 月報

NO. 683  
March 2018

## CONTENTS

1 『本朝書籍目録』

——書き継がれてきた日本の図書目録  
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

4 おーるあばうと

レファレンス協同データベース

14 資料の世界の歩き方 変体仮名でめぐる資料あれこれ ③

カルタで覚える かなと教訓

21 デジタルライブラリーカフェ営業中

13 開館70周年記念展示 本の玉手箱

——国立国会図書館70年の歴史と蔵書——から①  
『チヨースー著作集』

20 館内スコープ

次世代室の謎に迫れ！

26 本屋にない本

『大熊町震災記録誌』

27 NDL TOPICS

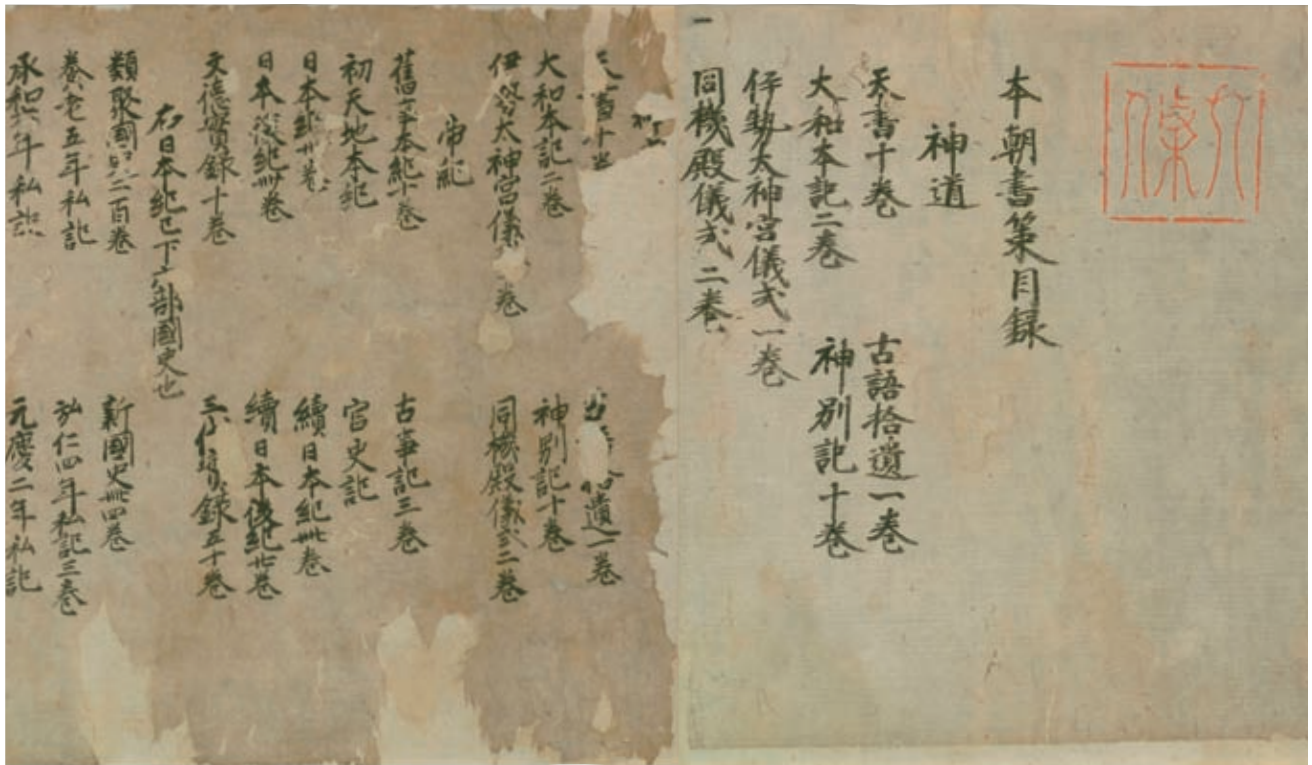


表紙：  
「楽しい三月」 古賀春江 画  
『コドモノクニ』第11巻 第3号  
昭和7（1932）年3月 東京社 26cm  
<請求記号 Z32-B158>

# 『本朝書籍目録』

——書き継がれてきた日本の図書目録

浜田久美子



## 本朝書策目録

写[室町末期] 1軸 29.5cm <請求記号 WA16-49>  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540646>

『本朝書籍目録』は、日本で編纂された「国書」四九三部を、帝紀・公事・政要・氏族・地理・詩家など二十の編目に分類して掲載した図書目録である。<sup>①</sup>収録書名や永仁二年（一二九四）奥書の存在から、鎌倉時代後期の成立とされるが、正確な編纂時期や編者は不明である。これ以前の『本朝法家文書目録』や『通憲入道蔵書目録』など、特定の主題や蔵書家の目録とは異なり、現存最古の国書総目録とされる。<sup>②</sup>

国立国会図書館では数種の伝本を所蔵するが、貴重書本（冒頭写真）は、奥書や注がなく、紙質、筆跡などから室町時代末期の書写とされる。<sup>③</sup>後補料紙の右上に「九條」の朱方印があるように、九条公爵家旧蔵本である。<sup>④</sup>もうひとつの古写本である東洋文庫所蔵の岩崎文庫本が「類聚」部冒頭から「雑抄」部末尾までの残欠本のため、この貴重書本が最も原本に近い内容と考えてよいであろう。

刊本には寛文十一年（一六七二）本（次ページ画像、次々ページ画像B）と群書類従本（同C）の二種類があり、後者は『群書類従第二八輯』（続群書類従完成会、一九五九年（三版））に収録され、容易に閲覧できる。しかし、著者は貴重書本



当館所蔵の寛文刊本は国学者伴信友による書き入れがある。

本朝書籍目録 長尾平兵衛 寛文11

<請求記号 京-327>

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2533951>

を見て、群書類従本との内容の違いに驚かされた。そこで伝本を調査しようと思ったのである。

『本朝書籍目録』には「本朝書籍」「日本書籍惣目録」「仁和寺書籍目録」「御室和書目録」など異なる書名も含む、多様な伝本が存在する。貴重書本は書名と巻数のみを記すシンプルな内容だが、多くの伝本には編者などが記されている。また、貴族の日記を載せる「諸家名記」や、南北朝や室町時代の公卿二条良基、一条経嗣、一条兼良の著作目録のほか、「本朝書籍目録外録」などが追記されているものも多い。

一九三六年に『本朝書籍目録考証』を著した和田英松氏は、約五十の伝本を調査しているが、戦前期と今とでは伝本の残存状況は異なる。そこで、筆者は六五の伝本を調査し、古写本について系統整理を試みた<sup>6)</sup>。しかし、多くの近世写本の整理には至らなかった。近年、久保木秀夫氏は六六の伝本の一覧を注の有無や奥書の種類などで分類しているが、「悉皆に近い形での調査を果たしていつ終えられるのか(中略)まったく見通しを立てられずにいる」と記している<sup>7)</sup>。

諸伝本を実見するなかで、その内容に

も興味を持った。古代の法制史料である「弘仁式」は一部の断簡を残すのみではとんどが散逸したが、「弘仁格式序」(『類聚三代格』巻一所収)や『本朝法家文書目録』より四十巻であることが知られている。貴重書本は「弘仁式」の巻数を四十巻としている(A)が、寛文十一年(二六七二)刊本は三十巻で「或四十」の注を付し(B)、群書類従本は三十巻とのみ記している(C)。

なぜ二つの刊本に誤った巻数が記されたのだろうか。調べてみると、三十巻本の弘仁式が現存し、江戸時代より偽書とみられていることがわかった。そこで、本来の弘仁式が早い段階で散逸し、江戸時代に偽の三十巻本が成立したため、『本朝書籍目録』の弘仁式の巻数が四十巻から三十巻に変化したと考察した<sup>8)</sup>。たとえ偽書であっても、当時三十巻本弘仁式が存在したため、目録の記載に「三十巻」という情報が加わったのであろう。

このことから、この目録が歴史書や文学作品のように定まったテキストとして伝写されてきたのではなく、生きた書目として時代のなかで書き継がれてきたことがわかる。実際、室町時代には、天皇や貴族たちの典籍採訪にあたり、各家の



# おーるあばうと レファレンス協同 データベース

Library of the Year 2017  
ライブラリアンシップ賞  
受賞記念

国立国会図書館レファレンス協同データベース事業とその参加館および協力者が、「Library of the Year 2017 ライブラリアンシップ賞：レファレンスの集積・可視化・公共財化」を受賞しました。

Library of the Year は、NPO 法人知的資源イニシアティブ (IRI) が図書館等を対象として授与する賞で、他の図書館にとって参考になるすぐれた活動や、独創的で意欲的に取り組んでいる具体的な事例を評価し、広く知らしめることを目的としています。

このうち、2016年に新設されたライブラリアンシップ賞は、長年にわたって地域住民や図書館員が協同し、さまざまな図書館活動を継続的に行った図書館等を称えるものです。

今回の受賞では、750を超えるあらゆる館種の機関が協力しあって、わが国のレファレンス・サービスの事例を長年にわたって集積し、社会に対して可視化・公共財化した意義が評価されました。また、本賞は当館および本事業にとどまらず、同事業に協力したすべての関係者による長年の尽力と連携が表彰の対象となりました。

今月号ではこれを機に、レファレンス協同データベースについて、ぎゅっとまとめて特集します！！



レファレンス協同データベース  
イメージキャラクター れはっち



いただいたトロフィーです。



表彰式は、第19回図書館総合展のフォーラム「Library of the Year 2017」の一部として昨年11月8日(水)に横浜みなとみらいのパシフィコ横浜で開催されました。



## 表彰式に登壇くださったみなさまからコメントをいただきました。

埼玉県立久喜図書館  
前野早苗氏、川崎みゆき氏（レファ協参加館代表）

レファ協の事業が評価されたことを大変うれしく思うと同時に、参加館を代表して授賞式に登壇させていただき光栄に思っています。当館は公開事例数も多く、遡及分の修正を含め編集作業には大変な時間と労力がかかっています。これからも、“だれでも活用できる”レファレンス事例を公開するよう取り組んでいきます。

今回の受賞はNDLだけでなく、参加館や協力者など多くの関係者に対するものです。さまざまな立場でレファ協に協力いただいている方々と一緒に賞を受け取りました。

（写真左から齊藤氏、川崎氏、前野氏、大島、坂井氏）

日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館  
坂井華奈子氏（レファ協企画協力員）

企画協力員としてはまだ日が浅いのですが、会議やフォーラム、研修でのコメント付与などを通し、ひとつひとつの事例の蓄積の背景にある各館のライブラリアンの奮闘や、事業としての根幹をなす事務局のご尽力などを改めて実感しています。レファレンスという図書館サービスを通して複合的に成り立つレファ協がこのような形で評価されたこと、大変うれしく思います。



千葉経済大学短期大学部教授  
齊藤誠一氏  
（レファ協サポーター、元・企画協力員）

レファ協の発足当初を知っている者として、今回の受賞は感無量であり、レファ協が多くの方に認知された証だと思います。今後も「使えるデータベース」として更なる発展を願っています。

国立国会図書館関西館  
図書館協力課長 大島康作

多くの方々の長年のご尽力、ご協力により、レファ協が築き上げられてきました。みなさまにお礼を申し上げます。今回の受賞を励みに、参加館の輪を広げながら、参加館、協力者のみなさまとますます協力して事業を推進して参ります。

## ところで レファレンス協同データベースって何？



レファレンス協同データベース（レファ協）は、当館が全国の図書館等と協同で構築している、調べ物のためのデータベースです。参加館で行われたレファレンスの記録など、調べ物に役立つデータが約20万件登録されており、そのうち10万件以上がインターネット上でどなたでもご覧になれます。

### レファ協用語集



<レファ協に登録されているデータ>

**レファレンス事例**：参加館で行われたレファレンスサービスの記録

**調べ方マニュアル**：特定のテーマやトピックに関する情報源の調べ方

**特別コレクション**：個人文庫や貴重書など、参加館が所蔵する特殊なコレクションに関する情報

**参加館プロフィール**：レファ協に参加している各参加館の情報

<データの公開レベル>

各データには、次のいずれかの公開レベルが設定されています。

**一般公開**：インターネット上で誰でも閲覧可能

**参加館公開**：参加館のみ閲覧可能

**自館のみ参照**：データを登録した館のみ閲覧可能

<協力者>

**企画協力員**：データの質の向上のための活動、事業の広報や研修など、多方面で協力くださっている方々。参加館職員や外部有識者に委嘱しています。

**サポーター**：レファ協の活性化や広報のため、各所で活動くださっている方々。いわばレファ協の「応援団」です。色々な所属・経歴の方が立候補のうえ、登録くださっています。



<http://crd.ndl.go.jp/reference/>

# レファ協 クロニクル 2002-2017

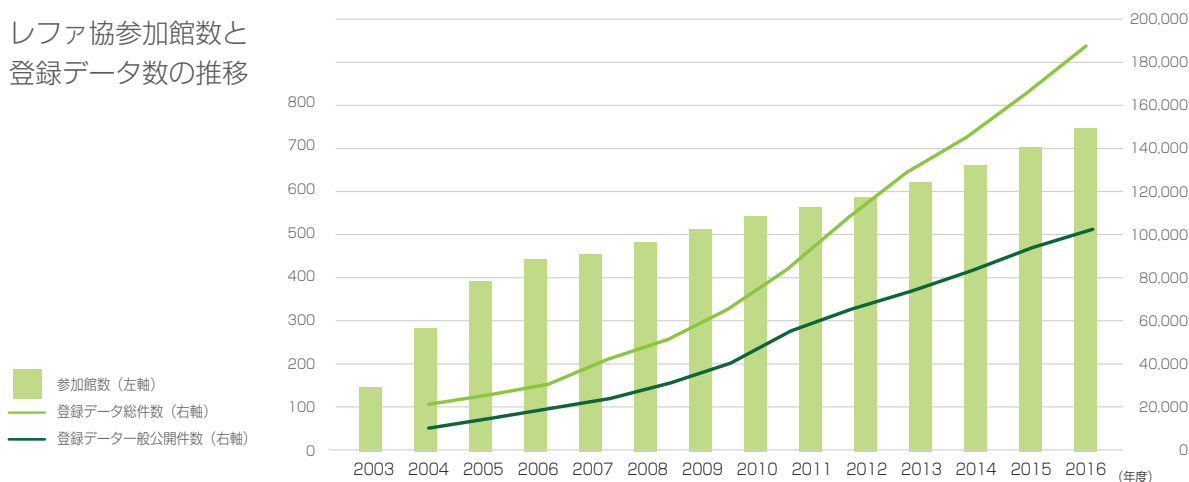


70th  
過去を読み、未来を読む。

「NDL、レファレンス協同データベース実験事業を実施」。そんな見出しと共にレファ協が初めて広く紹介されたのは、2002年10月2日発行の『カレントアウェアネス-E』創刊号でのことでした。

実験事業として始まったレファ協は、多くの方々の協力を得ながら、現在に至るまで成長を続けています。その歩みを振り返ってみましょう。

レファ協参加館数と登録データ数の推移



## 実験事業段階

2002年10月に開館した国立国会図書館(以下、NDL) 関西館の設置目的のひとつは、電子図書館サービスの実施でした。その一環として、全国のレファレンス事例を統合するデータベースを構築・運用し、その可能性を検証する3か年の実験事業がスタートしました。

システム開発にあたっては、担当者が国内の図書館へアンケートを実施し、レファレンス事例等の記録や活用の状況、レファレンス記録システムの有無などを調査するとともに、データベースの必要性や求める機能などについて意見を聞き取りました。また、海外デジタルレファレンスサービスの動向調査も行いました。

2003年、第一期参加館募集を行った結果、公共図書館・大学図書館・専門図書館などさまざまな館種から148館が参加館となりました。翌年4月1日にシステムを参加館に正式公開し、参加館からのデータ登録が本格化します。

2005年2月、実験事業の締めくくりとして開催した初の参加館フォーラムには、100機関から137名の関係者が集まり



2009 2008 2007 2006 2005 2004 2003 2002

- 2009 2 御礼状送付「スタート」
- 2008 7 利用者アンケート実施  
学校図書館の実験参加開始
- 2007 11 企画「コメント祭」開催  
「コメント機能」インタビュアー連載（レファ協ウェブサイトにデータと解説）刊行
- 2006 2 『レファレンス協同データベース事業調べ方マニュアル』データ集  
9 企画「コメント祭」開催  
7 レファレンス協同データベース事業企画協力員 委嘱  
4 組織再編に伴う事業移管（電子図書館課から図書館協力課へ）  
2 デジタルアーカイフポータルとの統合検索対象に追加
- 2005 12 レファレンス協同データベース一般公開  
10 第1回レファレンス協同データベース事業参加館フォーラム  
10 データ作成公開に関するガイドライン策定  
4 本格事業化。「レファレンス協同データベース事業」に改称  
3 「コメント機能」提供開始
- 2004 2 第1回レファレンス協同データベース事業参加館フォーラム  
7 有識者ヒアリング開催（12月、全5回）  
4 システムを参加館に公開
- 2003 12 第1回参加館会議  
9 実施要項および参加規定策定  
9 事業紹介ページを公開
- 2002 8 実施計画策定  
基本設計開始、システム開発開始  
国内アンケート調査、関係機関説明会、参加館準備会議等

148館が最初の参加館となりました（公共図書館78、大学図書館51、専門図書館16、支部図書館2、NDL）。



企画協力員がレファ協データへ情報提供、感想などのコメントをつける企画。一か月間で約100件のデータにコメントがつけられました。

登録データについて参加館同士が意見や情報を交換できるようになりました。コメントのおかげで解決した事例も！

2度目のコメント祭りは参加館全体にコメントをつのり、みんなでコメントをつけ合いました。



2009年から、データ登録数・アクセス数などで一定の基準を満たした機関に、国立国会図書館長からの御礼状をお送りしています。



初期のトップ画面

ました。さまざまな館種の機関でレファレンスサービスに関わる職員が一堂に会する（おそらく）初の機会となったこのフォーラムでは、レファレンス記録の活用やデータの品質を保つための方策などについて意見が交わされ、特に、館種を超えた「協同の場」としてのレファ協の意義が強調されました。

そのような場であることをさらに活かすべく、この頃には、登録データについて参加館同士が意見や情報を交換できるコメント機能を開発しています。

### 本格サービス開始

3か年の実験事業段階を終えたレファ協は、2005年4月に「レファレンス協同データベース事業」と改称し、12月、データベースを一般公開しました。

2006年からは、参加館の職員や外部有識者からなる企画協力員会議を開催しています。レファ協の広報に活躍しているイメージキャラクターの「れはっち」も、この年に誕生しました。

### つながりの拡大

その後、参加館数は徐々に増えていき、データ登録数も着実に増加、2012年に

2014

8 ツイッターのフォロワー数が1万を超える

未参加館向け説明会

7 制作

「これはうちのおでかけレポート」連載(レファ協ウェブサイト)

レファレンス協同データベース登録事例集第一集 参加館種別編

11 企画「みんなの手をたたく」

7 学校図書館学校図書館関係団体の正式参加開始

2 データベース事業フォーラム企画

3 写真展「レファレンスサービスのある風景」(第9回レファレンス協同)

2 API2.0の提供を開始

2012

12 データ総数10万件突破

10 企画「コメントで応援! 公開レベルアップキャンペーン」

企画協力員賞スタート

2 サポーター登録制度スタート

2011

9 企画「API腕自慢」

8 企画「夏休み定番事例」

8 データ作成公開に関するガイドラインを改訂

4 ツイッター公式アカウント開設 (@ord\_tweet)

3 レファレンス事例を対象としたAPI2.0の提供を開始

2010

10 企画「教えて!定番事例」

6 企画「例題にチャレンジ」

「教えて、お宅のレファレンス」連載(レファ協ウェブサイト)

2009



レファ協には、データに拍手ができる「拍手機能」があります。この企画では、広く一般の方にも参加をつのり、ツイッターでも「#レファ協拍手」のハッシュタグでつぶやいていただきました。

拍手数	賞状
0	なし
1~5	葉っぱ1枚
6~20	葉っぱ2枚
21~50	?
51~100	?
101~1000	?
1001~	?



「参加館公開」の事例にサポーターからコメントをつけてもらい、「一般公開」への後押しをしてもらう企画。

御礼状の基準には届かないけれど貢献が大きい館に対して、企画協力員の協議で賞をお送りしています。

基本的なレファレンス・ツールやインターネット情報資源を用いて即答できる事例や、各館で頻繁に聞かれる事例といった「定番」を積極的に登録してもらう企画。

レファ協 API を用いたアプリケーションを募集した企画。ツイッターでのつぶやきを解析してレファ協事例を紹介してくれる bot 「おしえて! れはっち」もこのとき誕生しています。



さらに、レファレンスライブラリアンを描

### さらなる展開へ

2014年にはツイッターのフォロワー数が1万を突破、翌年にはデータ登録総数が15万件を突破しています。

また、学校図書館の活用が進む中で、多くの参加のご要望をいただいたことから、2008年に学校図書館の実験参加を開始し、2013年には正式に参加対象としました。

## レファ協立ち上げ時に 尽力いただいたみなさまからの声



東邦大学医学メディアセンター 大橋病院図書室 牛澤典子氏

受賞おめでとうございます！

協力をやめてから久しいですが、今でもレファレンス事例は毎日のように拝見しており、全国の図書館員が世の中の難問を日々解決している様子に、いつも驚嘆しています。

協力員の時に各地で活躍されている図書館員の皆様、関西館の皆様と一緒できたのは大変貴重な経験でした。皆のアツイ気持ちがレファ協を作りあげているのだと実感したものです。

私は医学系の図書館にいるため、やはり医療に関するレファレンスに一番興味があります。質問者のプライバシーへの配慮が必要なので、医療に関連する事例の登録は大変だと思いましたが、増えている医療・健康情報サービスにおおいに資するものと期待しております。



青山学院大学教育人間科学部教授 小田光宏氏

レファ協の創設前の準備期間を含め、人生の4分の1をこの事業とつきあっている。改めて振り返ると、多様な「発想」が次々と生み出されたことに気づく。

そもそも、四つのデータベース（p5参照）からなること自体、レファレンスサービスを質問回答サービスだけに制約しない考え方として秀逸である。全国の図書館が「協同」すること、しかも館種を超えていることは、国立国会図書館の事業として、発足当初、驚きの眼差しで迎えられた。見逃せないのは、コメント機能を設けたことであろう。

発展を促す「しかけ」や「はたらきかけ」も心憎い。事業の主役である参加館の祭典として、早春に開かれるフォーラム。運営を手助けする企画協力員とサポーターの制度。レファレンスサービスの技能向上に資する「研修モード」には、ずいぶんとお世話になった。参加条件を厳しくしない進め方は、小田語録では「ゆるレファ」としているが、これはレファ協の基調である。

真骨頂は、随所に見られる「遊び心」か。いつの頃からか公式キャラクターに出世した「れはっち」、そして、彼（彼女？）の姿入りのレファ協グッズ。「拍手」ボタンは、私のお気に入り（喝采!）。参加館の貢献に対する「御礼状送付」は、「そこまでやるか」の一言に尽きる。思い起こせば、「レファ協」という愛称を、フォーラムの講演で発言したら、どさくさ紛れで定着してしまった。こんな歩みが、レファ協らしく心地よい。

しかし、こうした様々な発想の原点は、創設の準備期間に行われた関係者ヒアリングにおいて、すでに見え隠れしていた。ヒアリングと言っても、実質は討議であり、数時間に及んだ。メンバーは、田村俊作さん、大串夏身さん、そして私である。レファレンスサービスを専門とする3名が一堂に会して語り合ったのは、未だにこのときしかない。レファ協の強烈な思い出の一コマである。



2017 2016 2015

11 Library of the Year 2017 ライブリー・オブ・ザ・イヤーを受賞

10 企画「掘り出せ！図書館埋蔵金キャンペーン」

10 ツイッターのフォロワー数が2万を超える

7 『レファレンス協同データベース登録事例集第2集』学校で使える事例編制作

7 英語版事業紹介ページ「What's CRD?」を新設

6 データ総数15万件突破



レファ協未参加の図書館を対象に、事業を知ってもらうための研修会を初めて開催しました。

Excel や Access などのデータでレファレンス記録を保存している図書館を募り、そのデータを事務局がレファ協へ一括登録可能な方式に変換するという企画。7館から応募があり、約3,700件のデータが登録されました。

いた桢納タオ氏の漫画作品『夜明けの図書館』にレファ協が登場し、より広く認知されるきっかけとなりました。

レファ協の歩みを振り返ると、このデータベースをめぐってさまざまな形での「つながり」が生まれ、維持され、変化しながら成長してきたことがわかります。今後参加館、協力者、そして利用者のみならずと共に、事業のさらなる成長・発展を目指してまいります。

### 昭和女子大学名誉教授 大串夏身氏

事業を開始するにあたって、都道府県立図書館などへ参加を働きかけた。事務局は、手分けして電話をかけたりして働きかけたが、県立図書館のなかにはなかなか参加するとは言ってくれなかったところがあって、何度も、時には長い時間をかけて参加するように働きかけたという。将来、図書館員だけでなく、地域住民、学生、生徒など、皆が活用するものになってもらいたい。図書館員は、仕事で参照するだけでなく、研修などにも活用してほしい。さらに、海外の図書館員が、日本のことを聞かれたらまず参照するデータベースになるようにお願いしたい。



### 秋田県図書館協会顧問 山崎博樹氏

事業担当者として、企画協力員として、13年間関係させていただきました。この事業は国立国会、公立、大学、専門、学校の各図書館と館種を問わず参加可能という点が優れています。また、企画協力員、サポーター制度も効果的な存在であると思います。このことは、LoY2017 ライブラリアンシップ賞に選ばれる大きな要因でした。特に企画協力員会議は、他の会議とずいぶん雰囲気違って、かなり突っ込んだ検討や議論がされ、初めての方は戸惑うこともあったようです。

本事業が本格開始して13年を迎えようとしています。登録件数は当初目標とした10万件を超え、多くの方々に利用されるようになりました。当初は事業の認知度がまだとても低く、全国の図書館に電話をかけ続けたことが、今では懐かしい思い出です。事業を継続的に続けていくこと、常にオープンなスタンスであること。この二つを私からのエールとして送りたいと思います。



### 国立国会図書館関西館 依田紀久

葉っぱが土にかえりやがて森を豊かにしていくように、レファレンス事例もたくさん集まり見つけやすくなれば、調べるための環境が良くなり、きっと知識が豊かになる。当初は、「実験」事業としてやるべきことも焦点が定まらずにいましたが、レファレンスサービスに思いを持つ人たちが議論する中で、このコンセプトが定まり、やがて事業は楽しく動き出しました。事業の開始当初、「つなぎ役」となる事務局の一人として、たくさんの方々の思いを聞き出し、記録し、伝えることに奔走し、その傍ら、制度とシステムと業務を形にしていっていった日々は、今では懐かしい思い出です。

レファレンスサービスは知識を豊かにするための社会的な装置だとすれば、もっとできることがあるのかもしれない。これからもレファレンスサービスに「熱い」人がつながる結節点としてレファ協が発展していくことを願っています。

### 千葉経済大学短期大学部教授 齊藤誠一氏

今、レファ協を“わらじ”という言葉で検索すると56件の事例がヒットします。検索をするたびにその数は増えています。レファ協が立ち上がる以前、「同じような問い合わせはそんなに多くないのでレファレンス記録を残しても役に立たない」とある人から言われたことがあります。「そんなことは絶対にない!」といつか証明したいと思っていました。私にとって“わらじ”は証明のためのキーワードになりました。同じような問い合わせは必ずある。だからレファレンス記録を残し、将来の問い合わせに備えることが必要なのです。

「前の事例がヒントになってその後の調査が充実したものになる」

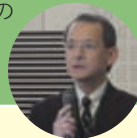
調査は、情報の連鎖によって的確な情報に結びつきます。そして事例の蓄積は、時間の経過の中でその時代の世相を見る鏡にもなると思います。ライブラリアンシップ賞の受賞は、立ち上げの時の理念が間違っていなかったことが認知されたのだと思います。今後もデータの蓄積が大きな力になることを信じています。



### 株式会社図書館流通センター顧問 寺尾隆氏

様々な図書館で日々利用者のために行われているレファレンスサービス。それらのレファレンス記録、パスファインダーは、図書館員の努力の結晶です。それらの貴重なデータが、長年にわたり参加館の尽力によって登録されて来たレファレンス協同データベース事業が今回受賞の栄誉を受けました。本事業に関わって来られた方々とともに喜びを分かち合いたいと思います。

2006年、ある未解決事例に多くの図書館からコメント機能により次々と情報が寄せられたことがありました。レファ協の意義を感じ、とても印象に残っています。これからも、レファ協が「謎に挑む」多くの人々に役立って行くことを心より願っています。



レファ協立ち上げ時に  
尽力いただいたみなさまからの声



# レファ協参加館通信 番外編

レファ協を一緒に作り上げてくださる、参加館のみなさまからの声をおとどけします。

埼玉県立  
久喜図書館



県立図書館のなかで、久喜図書館は自然科学、技術、芸術、言語、文学、児童の分野を担当。

## れはっちのおでかけレポート

れはっちはこのたび、埼玉県東部に位置する埼玉県立久喜図書館にお邪魔してきました。2004年からレファ協に参加されている埼玉県立図書館は、累計データ登録数とアクセス数の両方で群を抜いています\*（データ登録数約10,400件、年間アクセス数約420万件\*\*）。レファ協とはどのようにお付き合いくださっているのでしょうか？じっくりお話を聞いてきました。

——レファレンスはどのような体制で行われていますか？

県立熊谷図書館・久喜図書館の各カウンターで受付（来館・電話・FAX・郵送）、調査しています。また、県立図書館のウェブサイトからもメールでレファレンスを受け付けています。



一般レファレンスカウンターと子ども図書室のカウンターです！

——一年間に受けるレファレンス件数は何件ですか？どんな内容が多いでしょうか？

平成28年度は4万4879件（そのうち、ある程度複雑な調査が必要なレファレンスは1万4296件）でした。内容は歴史・社会科学や地域資料関係が多いです。

——レファ協への登録はどのように行っていますか？

各館のカウンターで、レファレンスの調査・回答作成時に記録を作成しています。その記録を参考に、入力担当者がレファ協へ「自館のみ参照」（＝データ登録のみ閲覧可能）で登録を行った後、

全館で回覧し、不足点や修正すべき点を指摘してもらいます。その後、登録取りまとめ担当者が修正等を行って、データを「一般公開」（＝インターネット上で誰でも閲覧可能）に切り替えます。

データ登録のバッチを2ヶ月に1回設けていて、年度中の登録件数の目標も定めています。

——印象に残っている事例やエピソードはありますか？

唱歌に関するレファレンス事例をレファ協で公開していたところ、一般の方からメールで情報提供があり、再調査してその結果をデータに反映しました。情報提供してくださったのは年配の方で、メールをやり取りする中で感謝の言葉もいただきました。一般の方もレファ協を結構見てくださっているのだなあと、印象に残っています。



レファ協を見た一般の方からの情報提供で解決した事例

\* 埼玉県立久喜図書館では、埼玉県立図書館2館（久喜、熊谷）のレファレンス事例が登録されています。

\*\* データ登録数は2017年12月31日時点、アクセス数は2017年の1年間。

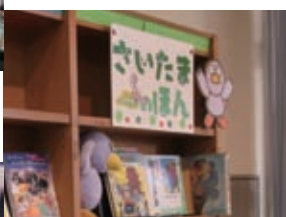
——レファ協に参加する一番のメリットはどういった点でしょうか？

レファレンスサービスをPRできる点です。図書館は本の貸出ししかしていない、と思っている方もまだ多いように思いますが、レファ協に事例を載せることで、図書館の機能を知ってもらえます。図書館には、ビジネス支援や健康・介護の情報など生活に密着した情報も多いですし、レファレンスは、一度利用するとリピーターになる方が多いサービスでもあります！

——レファ協がこれからこうなったらいいな、と期待することはありますか？  
さらに多くの図書館や機関が参加して、豊富なデータが蓄積され、お互いに協力できること。また、自館で登録した事例がどのような反応を受け、どのように役立っているかが知りたいです。例えば、拍手ボタンがもっと使われたり、自館の事例が他館で参照されて調査に役立つ場合はそのことがわかる仕組みがあったりすると、参考や励みになります。



子ども図書室「しらべる本」のコーナーで、埼玉県のキャラクター「コバトン」と2ショット♪



子ども図書室にも「さいたまのほん」のコーナーが！



館内の様子です。健康・医療情報にも力をいれていच्छるとのこと。

すっかりした体制のもと、日々豊富なデータが登録され、外部の方からの情報提供も生かしながら、ブラッシュアップされているんですね。久喜図書館のみなさま、ありがとうございました！

## 学校図書館だより



神奈川県学校図書館員研究会 田子環氏

当研究会では、神奈川県内の高校図書館が集まり、団体としてレファ協に参加しています。

自校のレファレンス事例や、授業などで作成したブックリストをレファ協に登録し、記録として残せるだけでなく、他校と情報を共有することができて、大変助かっています。他校の事例を見て「このテーマではこの本が役立ちそう」と選書の参考にすることもあります。また、事例を一般公開することは、利用者である生徒や教職員からどんな質問が寄せられて、学校司書がどのように資料や情報を提供しているのか、といった学校図書館の日々の様子を外部の方に知っていただく貴重な機会になっています。今後ますます学校図書館の参加が増え、たくさんの方の事例が共有されるといいなあ、と願っています。

たくさんの方のご協力や好意に支えられて、レファ協はここまで歩みを進めてきました。今後も多くの方の力をお借りしながら、よりみなさまのお役に立てるデータベースへと成長していくことを目指します。

「新しく事業へ参加したい！」というみなさまも大歓迎です！事務局までいつでもお問い合わせください。  
(レファレンス協同データベース事務局メールアドレス：info-crd@ndl.go.jp)

開館70周年  
記念展示

開館70周年を記念して、幅広い蔵書の中から魅力ある様々な本を紹介する展示会を、今秋に行います。本誌では、会期までの間、主な展示資料を少しずつお見せします。

# 本の玉手箱

— 国立国会図書館 70 年の歴史と蔵書 — から ①

ウィリアム・モリス!



美麗!

## ケルムスコット・プレスの最高傑作 『チョーサー著作集』

Chaucer, Geoffrey, ca.1340-1400.  
The works of Geoffrey Chaucer, now newly imprinted.  
Hammersmith: Kelmscott Press, 1896. 1 v. f° <当館請求記号 WB41-41>

ケルムスコット・プレスは、19世紀英国の詩人・美術工芸家ウィリアム・モリスが、その理想を本の形で具体化した美装本のシリーズです。なかでも本書は「世界三大美書」の一つと呼ぶ人もあり、モリスの最高傑作とされています。当館では20年ぶりに展示します。44×61cmという大判の美しい版面を、是非ご覧ください。

※当館はケルムスコット・プレスの全セット（53点）を所蔵しており、会期中に展示替えを行い、合計6点の資料を展示します。本書は東京会場の前期での展示となります。

※「世界三大美書」と呼ばれるものの一つ、ダブス・プレスの『欽定訳聖書』は全展示期間にわたり展示します。



過去を読み、未来を読む。

**東京会場** 国立国会図書館東京本館 新館展示室  
10.18 (thu) — 11.24 (sat)  
**関西会場** 国立国会図書館関西館 大会議室  
11.30 (fri) — 12.22 (sat)

休館日、展示替え等の最新情報は、ホームページ>国立国会図書館開館70周年記念のページでご確認ください。



資料の世界の歩き方  
変体仮名でめぐる資料あれこれ ③



『教訓いろはたとゑ』より  
「と・鰭間宅兵衛／ち・梅王女房はる」  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1311234>  
「お・曾我五郎時致／く・在原屋業平」  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1311244>

## カルタで覚える かなと教訓

藤田 壮介



資料の世界の歩き方「変体仮名でめぐる資料あれこれ」では、国立国会図書館が所蔵するさまざまな資料を素材として、変体仮名の読み方を学んでいきます。





今回はカルタ？ でも札がバラバラになってないからこのままじゃ遊べないじゃん。



そう、カルタだよ。自分たちで紙を切って札にするんだ。浮世絵にも役者絵・美人画や風景画以外のものがあるあつて、今回のように切り取って遊んだりするよいうな「おもちゃ絵」と呼ばれるタイプの浮世絵もあつたんだよ。

へえ、そうなのか。

ほかに、舞台のパーツが印刷されていて、切り取って組み立てるタイプのもや、服を切り取って着せ替え人形みたいに遊ぶものとか、双六などいろんなものが作られていたんだ。

なんだか雑誌の付録みたいな感じだね。

たしかにそうだね。じゃあ順番に見ていこうか。まずは「と」の札から。



「お」「ち」も結構難しい……

「お」の点はダイナミックだね。

カルタってことは、この最初の①は「と」って読むはずだから、「とう…おち…かたる…かたる…おちる」でしょ。「語」だけで振り仮名は「かたる」なんだね。

うん、だいぶ読めたね。ところで、「と」の元になった漢字は何かわかる？

えーつと、なんだろう？「光」？ でも「と」と読むことはなさそうだしなあ…… ひよつとして「当」？

残念でした。これはもともと「登」なんだ。あつ↓

と崩れてきたんだよ。割り箸の袋に書かれている「おてもと」の「と」で見たことあるんじゃないかな。

こんなに違う形になるの！ そんなのわかんないよ。

確かにこれは元々の漢字とはけっこう違うように見えるね。それに比べると、③はもつと分かりやすいよ。濁点をよけて見てみると、この右側の部分は、漢字の部首のおおがい（頁）が崩れた形なんだ。

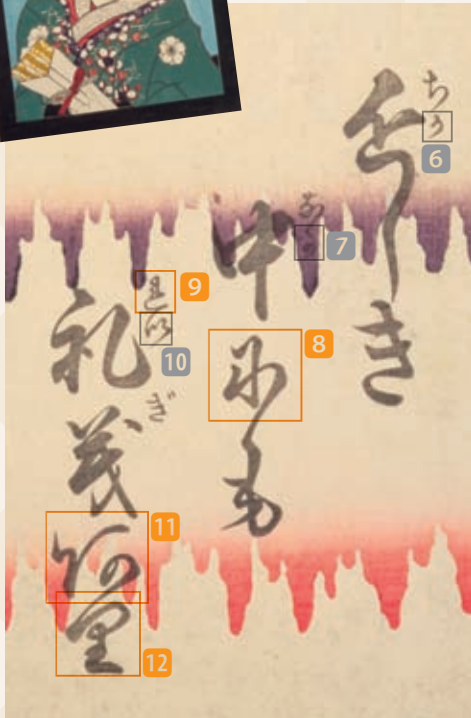
それはなんとなく分かるような気がする。

それで、左側は一本の線になってしまっているけど、もともとは「彡」なんだよ。

ということは「須」という漢字だね。じゃあ「す」って読むんだ！

そのとおり。あとは、②と⑤だね。この二つは形はちょっと違うけど、どっちも「尔（爾）」という漢字が元になっていて、「に」と読むんだ。

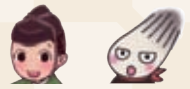




10	以	6	可
11	阿	8	丹
12	里	9	連

近しき中にも

礼儀あり



ということとは、「とうにおちずかたるにおちる」?

そう。「問うに落ちず語るに落ちる」。人に聞かれたときは用心して秘密にしていることでも、自分から話しているときは、つい口をすべらせて秘密を漏らしてしまうものだ、という教訓だよ。

教訓? オイラはそんなへましないよ。

はいはい、じゃあ次は「ち」の札。

おつ、これはだいたい読めるぞ。「ちかしきなかにも...いぎ...」。9は「礼」の振り仮名だから、きつと「れ」だね。つてことは、「近しき中にも礼義あり」じゃない?

そのとおりだよ。この「あ」は元の漢字が「阿」で、「り」の元の漢字は「里」。

やったー、当たり前!

やったー、当たり前!



だいが読めるぞ!  
「か」と「い」は前回で  
ばっちり!!

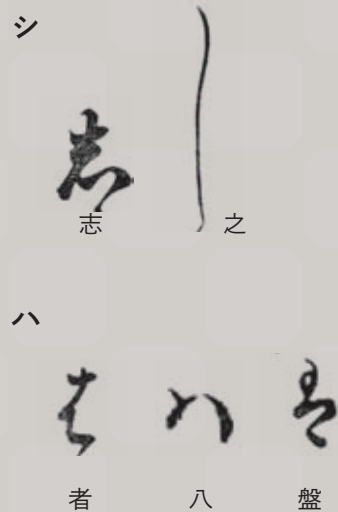
書いてあるのは日本語だから、ある程度文字が分かるようになってきたら推測で読んでいくのも良いね。ところで、この「に」と「れ」の元の漢字は何が分かる? 「に」は「尔」でしょ。もう忘れちゃったの? 残念! この字、確かによく似てるんだけど、これは「尔」じゃなくて「丹」が崩れて出来た変体仮名なんだ。え、こんなに似てるのに違う漢字が元になってるの? これじゃ区別できないよ。たしかに、区別しにくい時もあるかもね。まあいずれにせよ「に」だから、読む時はそんなに気にしなくても大丈夫。ふうん、そんなもんか。テキストなんだね。もう一つの「れ」は...ダメだ、こんなギザギザした字は分かんないや。

## 仮名の使い分け

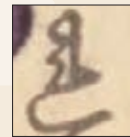
一つの音に対応する変体仮名は、一種類とは限りません。江戸時代でいえば、後期になるにつれ、出版物で用いられる仮名の種類は減少していく傾向があるようですが、今回の資料でも、同じ音に対して複数の仮名が使用されている様子をうかがうことができます。

複数ある仮名の中でどれを選択するかについて、一見原則はないように見えますが、意図的に使い分けがなされる例も知られています。たとえば「シ」の音を表記する場合、完全に使い分けがなされているわけではないものの、単語の頭などに来ている場合は「志」を用い、それ以外の位置は「之」を用いる、という傾向があります。「ハ」を用いる場面でも、単語の頭には「者」を用い、助詞として用いる際は「八」や「盤」を用いる例が多いとされています。

そのほか、特定の仮名が用いられる単語があったり、また、筆の流れの都合や文字を配置した際の美的側面も、仮名を選択する場合の要素になっていたようです。一つの音に対応する仮名が一つに限定されている現在とは違う仮名遣いの世界があったと言えるでしょう。



連(変体仮名)



近(漢字)



たしかにギザギザしているね。この「れ」、よく見ると文字の最後が、この札の一番目の漢字に似ていると思わない？一番目の漢字は「近」なんだけど、部首の「辶」が、右から入って左側に来て曲がってまた右下、という風に書かれているんだ。だから「れ」も「近」を使っただ漢字の「連」が元になっているんだ。へえくそうだったんだ。でも今回は調子がいいぞ。もっと読むものはないの？



「た」の札だね。

う〜ん、確かに「た」の字にとってもよく似ているけど、左側に線が一本多く見えるでしょ。これは「お」なんだよ。元になった漢字は「於」で、いまの「お」の元と同じなんだけど、字を崩した時の書き方がちよつと違ってらるんだ。

うう…今回は調子がいいと思ってたのに…しよぼぼん。ほらほら、そんなに気落ちしないで。続けて読んでごらんよ。



は〜い。「おもふ…んり…い…をとほ…」。二行目は「力」の振り仮名だから「り」の下は「き」だと思うけど、元の漢字はなんだろう？「紀」みたいな感じだけど。惜しい！でも確かにこの字だけを見ると「紀」に見えるなあ。

でしょ。「紀」じゃないとしたらなんなのさ。これは「起」という漢字が元なんだよ。と崩れてきたんだ。部首の「走」が左側に寄っているんだよ。

ふ〜ん。14は？

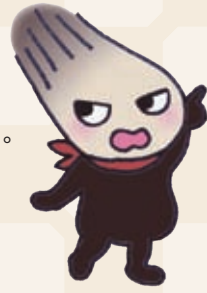
これは「祢」という漢字が元になってきた変体仮名で、「ね」だね。

「ねん力」…「念力」か!! オイラも使えるよ。

…そういうことは隠しておかないと「語るに落ちる」じゃないか。

17	王	13	於
18	本	14	祢
19	春	15	里
		16	起

「祢」はほとんど漢字だね。  
「力」はふりがなの方が難しいや。



しまった!

さてそれで17は、「わ」。「岩」という漢字の振り仮名になっているね。この「わ」の元の漢字は「王」だよ。論語や千字文を日本に伝えたと言われる「王仁」という人物の名前では、「王」を「わ」と読むよね。ということ、最後の一文以外を通して読むと、「思う念力岩を通」となるね。

じゃあ最後の一文は「す」じゃん。「岩を通す」でしょ。さっきの「須」とは違うけど、どうせまた別の漢字がもとになっているんじゃないの。

そう、よくわかったね。この「す」は「春」という漢字が元になっているんだよ。

え〜、「春」が「す」なの？ しかも「す」にはほかに「寸」もあるのに! いったいいくつ覚えればいいのか。

「思う念力岩を通す」。そんなイヤそうにしないで頑張ろうよ、変体仮名が読めるようになってほしいんだよ。さあさあ次は「く」の札だね。





えくまだやるの。仕方ないなあ。「くさいものミ……ら  
ず」。あつ、ミは片仮名だから違うか。

ううん。たしかに片仮名のように見えるけど、「三」が  
崩れてできたもので、ここに書かれているのも変体仮  
名なんだ。

じゃあ「み」で良かったってことか。よし、あと一文  
字<sup>22</sup>でおしまいだ。これは「志」に似てるなあ。

よくわかったね。その通り！

ということは、読み方は「し」だね。「くさいものみし  
らず」。ってどういう意味？

「臭いもの身知らず」自分の欠点は自覚しにくいって意  
味だよ。

そうなんだ、知らなかった。よし、今回はこれで終わ  
りだ！

22	志	20	以
23	須	21	三

残りは宿題！！



札はまだまだあるんだけど、そうだね、今回は終わりにしよう。残りは宿題だよ。

ええええええ。厳しすぎない？「臭いもの身知らず」。その欠点、直した方がいいと思うよ……



### 次回予告

4月号は、カルタ……ではなくて、ちょっと長文にチャレンジします！

百人一首一夕話 9巻 [7]  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2554310/55>



(絵・正保五月)

※宿題の答え合わせは来月号で！

はじめまして！ 私は2017年4月に就職後、次世代システム開発研究室（次世代室）という場所で仕事をしています。でも、「次世代室」って何をすることをか想像しにくいですよ。

次世代室は、図書館の役割がインターネット等の情報技術で変化する中、より先進的なサービスを検討していくために作られた比較的新しい部署です。

現在、次世代室が取り組んでいる仕事には、「書籍以外にも含む様々な資料を効率的に検索するための実験システムの開発」、「映像や音声など、もともとデジタルの資料を長期的に保存するための調査」、「AI（機械学習）を利用して、デジタル化した資料をより良い形で提供するための研究」、「デジタルアーカイブや研究データの活用のためのイベント開催」などがあります。職員だけでは難しい課題や連携が必要な仕事も多いので、テーマに応じて外部の研究者・図書館関係者の皆様や館内の他部署とも協力しながら、「次世代」の図書館を模索しています。

次世代室の特色の一つとして、外部に委託するだけでなく、職員自身で開発や実験を行っていることが挙げられます。雰囲気としては静かな事務室というよりも、大学の研究室のようなものを想像して頂ければ分かりやすいかもしれません。例えばある日の会話の内容

容をご紹介しますと、

「ディープラーニングを利用した資料の白色化の実験結果はこんな感じでした。」

「なるほど。資料の活字の可読性が上がるようにコントラスト調整のパラメータを自動で学習してくれるんだね。」

「国立国会図書館デジタルコレクションから印刷する際にも読みやすくなりそうですよね。」

「OCRの読取精度向上にも使えそうですね。あとはうまくいかなかったケースの条件を再検討しようか。」

（以下、議論が続く……）

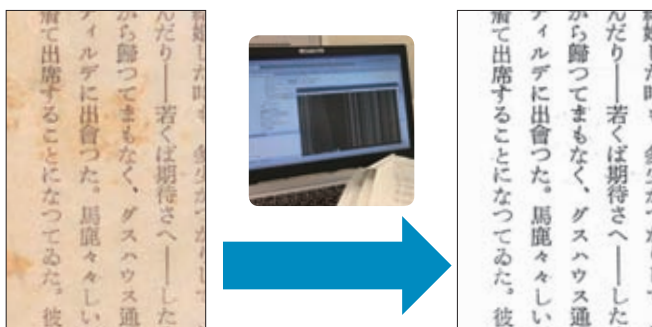
配属されてから感じた次世代室の業務の面白さとして、研究者の方と接する機会も多く、最新の技術について学ぶことができること、学会に参加したり論文を調べたり報告を書いたりといった仕事があること、希望すれば自分でプログラムを書いて新しいサービスを模索できることなどが挙げられます。一方で新人職員として、新しく勉強しなければならぬ業務知識は多く、周囲の上司や先輩職員にいつも助けて頂く日々です。

早く一人前になれるよう、また自分の仕事が多くの人役に立つよう、めげずに常に好奇心を持って精進して参ろうと思います。

（電子情報サービス課次世代システム開発研究室青蛙）

## 次世代室の謎に迫れ！

画像に対して機械学習を適用した実験  
背景白色化による紙の変色の除去



# Visualization

NDL DIGITAL LIBRARY



デジタルライブラリーカフェ 営業中

API

IIPC

## NDL Digital Collection

### Menu

NDL × データ可視化

地域資料を最新規格で  
お手軽に使いやすくしてみよう

2017年11月29日、12月2日に東京本館で、2年目となる「NDLデジタルライブラリーカフェ」(略して「デジカフェ」)を開催しました。

今回は、NDLのデジタルライブラリーサービスを通じて提供している書誌データや情報を、分かりやすく表現したり、より簡単に活用したりできるようなテーマを2つ取り上げ、そつした技術の普及に取組まれているゲストをお招きしました。当日は、ゲストの紹介する話題や技術について、各15名ほどの参加者を変えて語り合いました。

(電子情報部電子情報流通課)

電子情報サービス課次世代システム開発研究室

WARP

WARC

デジカフェは「サイエンスカフェ」の手法をモデルにしています。

「サイエンスカフェ」とは、科学者と市民が気軽に科学の話題について語り合う場を作ろうという試みで、市民と科学者、研究者をつなぐ新しいコミュニケーション手法として、大学や研究機関で広く行われています。デジカフェでは、デジタルライブラリーに関係のある様々なテーマを取り上げ、紹介します。

※前回のデジカフェについては、2017年3月号(671号)をご覧ください。

IIIIF



矢崎裕一氏  
合同会社ノーテーション代表  
Code for Tokyo 代表

## NDL × データ可視化



(1) 「NDLデータ活用ワークショップ～ウェブ・アーカイブの自治体サイトを可視化しよう～」での、WARPのデータを用いたデータ可視化については、月報2016年11月号(667号)をご覧ください。

(2) 詳しくは以下の記事をご覧ください。「ウェブアーカイブの保存用ファイルフォーマット WARC に関する ISO 規格が改訂」(カレントアウェアネス -R <http://current.ndl.go.jp/node/35316>)

「データ可視化」とは、データに含まれる様々な情報(その特徴・傾向)を、視覚的な表現(画像・グラフ・図・表)にすることで分かりやすく伝えることと、およびそのための技術を意味します。近年、量と多様性が爆発的に増加したデータの中から特徴や傾向を把握する手段として注目を集めています。11月29日のデジカフェでは、2016年7月に行った「NDLデータ活用ワークショップ～ウェブ・アーカイブの自治体サイトを可視化しよう～」を振り返りながら、可視化にあたっての作業の流れや便利なツールなど、データ可視化の概要の説明がありました<sup>(1)</sup>。

議録のデータを用いた実際の可視化の例も紹介いただきました。(次ページ参照) イベント後半のディスカッションでは、可視化を適切に行うための注意点が話題になりました。

### データ可視化のコツ

実際に可視化を行う際、対象となるデータの形態や大きさに応じて、適切な手法やその難易度は異なります。様々な手法を知っていると、適切な可視化のための試行錯誤を進めやすくなります。誰もが利用できるウェブサービスやツールが役に立つことは多いのですが、前提知識としてデータの標準的な

フォーマットや標準化団体があることを知ることも大事です。たとえばWARCの可視化であれば、ウェブアーカイブの標準化団体であるIIPC(国際インターネット保存コンソーシアム)の動向や保存用の標準フォーマットであるWARC<sup>(2)</sup>を理解しているとより確かな可視化ができるでしょう。

### データ可視化による誤解を防ぐには？

視覚に訴える可視化にはインパクトがあり、見る人に強い印象を与えます。フェイクニュースなどによる使用には注意しないといけませんし、偽りがないとしても誤解が生まれやすいような配慮や心構えは必要です。可視化する側はデータソースの明記や署名、また可視化にあたっての背景情報を添えることなどが誤解の防止に役立ちます。見る側の立場では、可視化されたものを鵜呑みにするのではなく、表現に対する疑問が無い意識することが求められるでしょう。

たとえば、以前のワークショップのように自治体のウェブページからある政策に注目して可視化を行う場合、政策が実際に取られたか否かだけでなく、政策がどの程度言及されたかという部分が可視化の対象になることも理解していないと、誤った印象を受ける可能性があります。

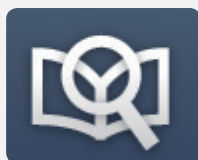
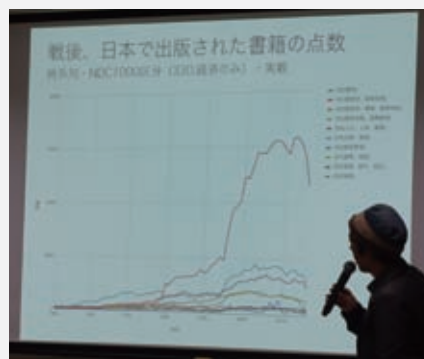




## NDLの書誌データに基づく出版分野の隆盛

1950年から2017年初頭までに日本で出版された日本語の図書資料を対象に、当館の提供する国立国会図書館サーチのAPIから取得できる書誌メタデータ約400万件を用いて、出版数が増えている分野を日本十進分類法(NDC)の第一区分から順番に細分化していった結果、「3. 社会科学」→「33. 経済」→「336. 経営管理」がもっとも多くなりました。

さらに右下の図は、この「経営管理」に分類された図書のタイトルに含まれる単語を抽出し、ワードクラウドと呼ばれる手法で、単語の出現頻度を文字の大小や濃淡によって表現しています。



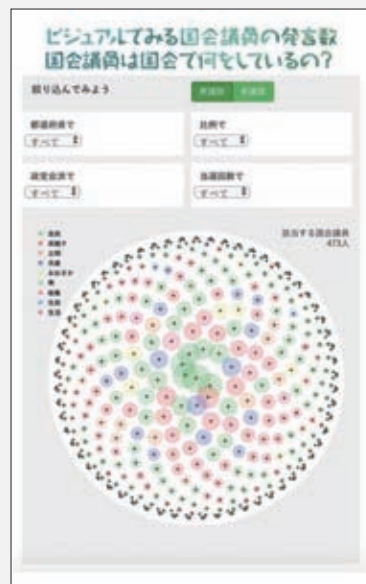
国立国会図書館  
サーチ API

0 総記	30 社会科学	330 経済
1 哲学	31 政治	331 経済学・経済思想
2 歴史	32 法律	332 経済史・事情・経済体制
3 社会科学	33 経済	333 経済政策・国際経済
4 自然科学	34 財政	334 人口・土地・資源
5 技術	35 統計	335 企業・経営
6 産業	36 社会	<b>336 経営管理</b>
7 芸術	37 教育	337 貨幣・通貨
8 言語	38 風俗習慣・民俗学・民族学	338 金融・銀行・信託
9 文学	39 国防・軍事	339 保険



## 国会での議員発言時間

NDLの提供する国会会議録から、衆参両院の議員一覧を用いて各議員の発言を抽出し、文字数から国会での発言時間を推測し可視化した作品。当選地や政党による絞込みに合わせて可視化部分が変化します。こうしたインタラクティブな可視化を利用した情報探索のアプローチについては、今後の発展が期待されます。

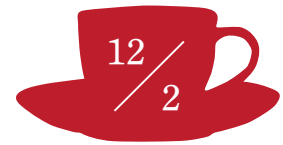


<https://seiji.yahoo.co.jp/youth/ideathon/tanq/graph/>  
元データ出典：「国会会議録」(国立国会図書館)、  
「衆議院議員一覧」(衆議院)、「参議院議員一覧」(参議院)



永崎研宣氏  
人文情報学研究所主席研究員

地域資料を最新規格で  
お手軽に使いやすくして  
みよう



「国立国会図書館デジタルコレクション」には、約266万点のコンテンツ画像が含まれ、中には地域の歴史や風土に関する資料も多く含まれています。12月2日のデジカフェでは、最新の画像共有規格IIF（トリプルアイエフ）を使って、このデジタルコレクションのコンテンツを使いやすく、地域資料に含まれる情報を発見しやすくする方法を紹介いただきました。参加者が実際に手を動かして地図や年表に地域資料をマッピングすることで、デジタルライブラリーの将来の可能性について一緒に考える機会となりました。

作業後のディスカッションでは、参

加者から「新しい規格の説明を聞くだけでなく、実用方法まで理解が深まった」、「一人だと手が出なかったが、今回の体験でハードルが下がった」といった感想がありました。

また、郷土史サークルが近隣地域の活動と連携する際に活用できるということや、観光をテーマにマッピング作業をイベントとして開催すると面白いのではといった話題、アンケートション作業で付与したコメントやタグが検索システムでヒットするようになれば地域資料の発見可能性が上がり、情報発信の新たな側面になるといった今後の発展についての話題がありました。

### IIIF（トリプルアイエフ）とは？

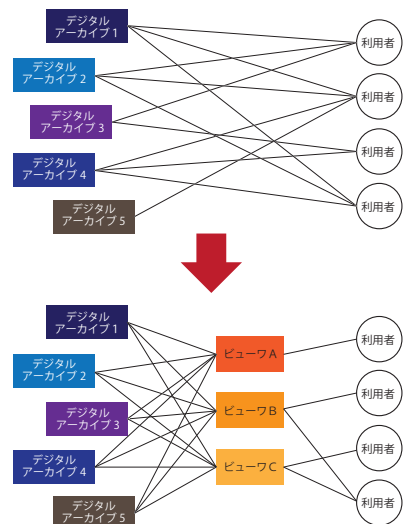
International Image interoperability Framework の略称。

ウェブ上にあるデジタル画像は、各機関やサービスによって、提供のためのシステムが異なっているという問題があり、利用者にとって不便であるだけでなく、機関同士・サービス同士の連携も妨げています。

こうした問題の解決を目指して、デジタル画像やそのメタデータをやり取りする仕組みを共通化したフレームワークがIIIFです。提供機関がIIIFに対応すれば、利用者はIIIFに対応した好みのビューワを使って、別々の機関の画像を並べて閲覧したり、コメントやタグを付けたり共有したり簡単にできるようになります。またIIIFは、技術的な開発や普及を進める画像提供機関や研究機関、個人からなるコミュニティそのものを指すこともあります。

国立国会図書館デジタルコレクションも今後IIIF対応を進める予定です。

IIIFについては、里見航「IIIF Japan シンポジウム<報告>」（カレントアウェアネス -E 1989 <http://current.ndl.go.jp/e1989>）もご覧ください。



IIIFの機能の一部：  
画像のやりとりの仕組みを共通化

## 実際に IIF を使ってみました



アノテーション作業の例  
『東京風景』の画像にある絵に、「上野之桜」というコメントと、「東京風景」「織田一麿」というタグを付けました。



マッピング作業後の例  
付与したコメントと資料の対応部分が地図上にプロットされ（この図では上野公園）、また図の下部にある年表にも表示されています。

© OpenStreetMap contributors



参加者は、資料画像の一部分にコメントやタグを付けるアノテーション作業と、付与したコメントやタグを資料の対応部分と一緒に地図上や年表上にプロットするマッピング作業を行いました。どちらの作業もマウスで選択し、コメントや年代をキーボードで入力するだけという簡単なものです。

なお、今回はあらかじめデジタルコレクションから、参加者に興味のある地域資料を挙げていただき、IIF に対応した資料画像を準備しました。作業のためのプラットフォームとしてはコンテンツマネジメントシステムの Omeka を使い、Omeka 上で IIF を利用した作業を行うためにトロント大学図書館が開発したプラグイン IIF Toolkit を利用しました。



今後も、NDLのデジタルライブラリーに関する研究や最新動向をより身近に、分かりやすく紹介する場を、デジタルフェを通じて提供したいと考えております。

多くの方のご参加をお待ちしております。



# 本屋に

# ない

# 本



## 大熊町震災記録誌

福島第一原発、立地町から。

大熊町企画調整課 編  
2017.3 167p 30cm  
<請求記号 EG77-L1668>

※入手ご希望の方には無料で郵送しています。  
大熊町企画調整課までお問合せください。  
電話 0242-26-3844  
メール kikakuchosei@town.okuma.fukushima.jp  
PDFファイルも公開しています。  
<http://www.town.okuma.fukushima.jp/fukkou/kirokushi>

「福島第一原発が稼働を始めて約40年。トラブルはあっても、全町避難や原発の爆発など全く想定していませんでした。(中略)誘致当初はあった危険性への認識も薄れていました。それが40年も原発立地地域で生活する、共生するという危うさだったと今は思います。」

右に引用したのは、本書の冒頭に寄せられた大熊町長・渡辺利綱の言葉である。福島県大熊町は、人口1万1505人(平成23年3月11日時点)。比較的温暖な太平洋岸に位置し、その太平洋岸に、北に隣接する双葉町とまたがって福島第一原子力発電所が立地する。町の居住地のほとんどは、原子力発電所の半径10キロ圏内にあつ

た。現在、町は約1000キロ西の会津若松市に役場や学校機能を移し、町民も同市や、より町と近隣にあるいわき市などに離散して生活している。

この『大熊町震災記録誌』には、東日本大震災、そして原発事故後から現在に至るまでの町の状況や対応の経緯が描かれている。記憶の風化を防ぎ今後の行政に資するために、とまとめられた記録誌である。全ページカラー印刷の豊富な図表と写真を備え、巻末に住民意向調査の結果や、東京電力作成の賠償項目一覧などの資料編も付されている。さらに本書の特徴として、行政担当者や住民たちの証言が数多く記録されている点が挙げられるだろう。コラム

として挿入された、あるいは、ページ欄外に記された証言の数々によって、町の状況を生々しくイメージさせる構成になっている。とりわけ、震災発生直後から翌日の全町避難までを扱った章がそうである。時系列に沿って展開する町の動きと防災行政無線の記録、現場で対応にあたった職員らの言葉——これらから当時の様子が立体的に伝えられる。

平成26年12月に決定された中間貯蔵施設の受け入れについても、その経緯の説明と並んで、受け入れ予定地区の区長による証言がある。

「自分が生まれ育ち、暮らしてきた場所・建物がすべてなくなつて、立ち入りすらできなくなることを想像でき

ますか。(中略)分かつていることとはいえ、言葉では言い表せない思いがします。我々には除染も宿泊も今後絶対に行かないから。置いて行かれるというか一步一步、町が遠ざかつていくような気持ちです。私たちは町の復興のために故郷をなくします。」(大熊町小入野地区区長・根本充春)

行政としての町や国の大きな動きと、現場での具体的なエピソードとが絶えず往還されている。息をつめながら、ページをめくるのを止めることができないう本だった。

本書は福島県大熊町による発行。しかし奥付には、発行元の所在地として会津若松市の住所が記されている。

(牛尾響<sup>ひびき</sup>)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

# NDL Topics

## 国際子ども図書館展示会 「オランダの金の筆と銀の筆—子どもの本の世界—」

国際子ども図書館では、3月6日（火）から7月15日（日）まで、展示会「オランダの金の筆と銀の筆—子どもの本の世界—」を開催します。

この展示会では、オランダで最も権威あるとされる子どもの本の賞であるGouden Griffel（金の石筆賞）とGouden Penaal（金の絵筆賞）を始めとする、さまざまな賞の受賞作と受賞作家を通して、オランダの子ども本の世界をご紹介します。

前期（3月6日～5月15日）は石筆賞・絵筆賞の1999年までの受賞作を、後期（5月17日～7月15日）は2000年以降の受賞作を主に展示します。皆さまの来場をお待ちしております。

### ○開催期間

前期：3月6日（火）～5月15日（火）  
後期：5月17日（木）～7月15日（日）

※月曜日、国民の祝日・休日（5月5日のこどもの日は開館、毎月第3水曜日（資料整理休館日）は休館）

### ○開催時間

9時30分～17時

### ○会場

国際子ども図書館 レンガ棟3階  
本のミュージアム

○問合せ先 国立国会図書館 国際子ども図書館  
資料情報課 展示係  
電話 03(3827)2053 (代表)

## 新刊案内

レファレンス 804号

平成30年の年頭のご挨拶

牛海綿状脳症（BSE）対策の経緯と現状

我が国の外国人労働者

カナダ自由党の組織改革

—「党費徴収なき政党」への道程—

地域経済の活性化に向けた金融行政の取組

—「地域密着型金融」の成果と課題—

地域金融機関による「地域密着型金融」への取組の現状

—九州地方における取組事例を踏まえて—（現地調査報告）

査報告）

在日米軍駐留経費の現状（資料）



A4 134頁 月刊 1,000円（税別）  
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

## 平成29年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「被災県が実施する震災アーカイブの意義」を開催しました

平成30年1月11日、東北大学災害科学国際研究所多目的ホールにて、東日本大震災アーカイブシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、国立国会図書館と東北大学災害科学国際研究所との共催により、毎年1月に開催しているものです。

今年度は、事務局から震災アーカイブを取り巻く国際動向として、平成29年11月に行われた「世界防災フォーラム」の概要が報告された他、東日本大震災及び熊本地震の被災県の震災アーカイブ担当者から、それぞれの取組事例や、震災アーカイブの現状と課題をテーマとして報告がなされました。また、国立国会図書館からは、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）の課題と取組について、権利処理の問題にも触れながら報告を行いました。

続くパネルディスカッションでは、県がアーカイブを持ち地域の資料を取りまとめることの重要性や、当面公開できない資料を収集・保管することの意義について、参加者も交えて活発な議論が行われました。



国立国会図書館からの報告



パネルディスカッションの様子

シンポジウムの詳細は以下に掲載しています。  
<http://kn.ndl.go.jp/static/events>

# オランダの 金の筆と 銀の筆

— 子どもの本の世界

入場  
無料

前期 <sup>2018</sup> 3.6 火 ▶ 5.15 火

後期 <sup>2018</sup> 5.17 木 ▶ 7.15 日

開館時間 午前9時30分 ~ 午後5時

休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日のこどもの日は除く)、毎月第3水曜日(資料整理休館日)

会場 国際子ども図書館 レンガ棟3階  
本のミュージアム



The Golden and Silver Brush Awards in the Netherlands  
- The world of children's books

(左下)「アップとヤネケ」 アニー・M.G.シュミット 作 フィーブ・ヴェステンデルブ 絵 西村由美 装丁 後藤葉子(QUESTO) 岩波書店 2004 (中)「かえるくん どうしたの」 マックス・ベルジュイス 文と絵 清水奈緒子 訳 セーラー出版 1990 (右下)「うさこちゃんのとんと」 ディック・ブルーナ ふん・え まつおかきょうこ やく 福音館書店 2008



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

# 3

NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2 0 1 8 . 3

NO.683  
MARCH  
2018

## CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>  
*Honcho shojaku mokuroku: Historical union catalog in Japan*
- 04 All about the Collaborative Reference Database
- 14 Browsing library materials — Reading Japanese written in variant kana 3  
Learning kana and well-known sayings from Japanese playing cards
- 21 The doors of the NDL Digital Library Cafe are open!
- 13 From The 70-anniversary Commemorative Exhibition : A Treasure Box of Books —  
The 70-year History of the National Diet Library and Its Collections  
*The works of Geoffrey Chaucer*
- 20 <Tidbits of information on NDL>  
An introduction to the Research and Development for Next-Generation Systems Office
- 26 <Books not commercially available>  
*Okumamachi shinsai kirokushi*
- 27 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成30年3月号 (No.683)

平成30年3月1日発行

発行所 国立国会図書館  
編集者 秋山勉  
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話 03 (3581) 2331 (代表)  
F A X 03 (3597) 5617  
E-mail geppo@ndl.go.jp  
http://www.ndl.go.jp/

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。  
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。  
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。

